

千刈狸の呟き

～ 傘寿を前に思う ～

バンクーバーでの17日間のオリンピックも終わった。日本選手の活躍を願いながら胸をドキドキさせて仕事も手に付かぬこともあった。底辺の広い競技は選手層が厚くレベルも高いし選ばれて出るには普通の努力では見込みはない。選手になるには英才教育が必須な種目もある。生まれ育った環境もさることながら親の意向で最初から何となく決められて気づいたらオリンピックの選手になっていた人もいるかもしれない。スポーツ、音楽、演劇等々英才教育の開始年齢は徐々に若くなりつつある。素質もあるであろうが、厳しい訓練に耐え抜いて上達し、さらに厳しい競争に勝ち抜いた者のみ選ばれる。オリンピックの表彰台に立つ、どんなに嬉しいことだろう。これをまず母に見せたいと選手は言う。母は偉大である。両親にと言う選手もいる。国旗掲揚に心が躍ると言う選手もいた。このような気持ちを持つ若者がいる限り日本もまだまだ捨てたものではない。今回のフィギュア男女全員の入賞は努力の賜である。心から御苦労様の拍手を送りたい。

今、我が国で憂いなければならない問題は子供の数が少ないことである。第二次世界大戦に若い男子が駆り出され、戦争が終わり、子供が一斉に増えた。団塊の世代である。この世代は定年を迎え年金生活に入りつつあるが、彼らの子供達が家庭を持つ世代に入った。しかし、近頃は結婚しない若者が増加しているという。それ故子供の数も増えることがない。未来を背負って立つのは大勢の子供達である。その子供達が少なくしてどうするというのだ。日本の未来は子供の数にかかっている。数少なくなった子供にいくら英才教育を施しても国が栄えはしない。世界一の長寿国になしました等と報じられても子供が少ないのでは年寄りも肩身が狭いだけである。父がいて母がいて毎日食卓を囲んでワイワイガヤガヤしていれば一寸したことでキレルこともなく優しさを持った人間に育ってゆくはずである。

厚労省原案では私は末期高齢者である。親を面倒みた最後の年代で子供に捨てられる最初の年代であると思っていたのが、極く稀ではあるが未だ年老いた親を面倒みている感心な子供達もいるのである。しかし親を捨てる風潮は大分前から始ま

っている。そのための介護老人ホームも流行っているのである。長い間人生行路を歩み、そして社会に貢献してきた人々を面倒みるというのは大変結構な話であるが、地獄の沙汰も金次第。年金から介護保険料を天引きされても入所金や毎月の負担金が払えない人にとっては絵に描いた餅である。金持ちの老人、また金持ちの孝行息子がいる人達は待遇の良い老人ホームで楽しい老後を送ることができるが、その他大勢の人達は人里離れ暗くなると狸が出る様な淋しく暗く貧しい一軒家に一人暮らし。食うものも燃料もろくにない。収入は5～6万円の国民年金のみ。ホームレスでないのが何よりの救いである。

暮れから春にかけ全国各地の友人から初しぼりという酒が届く。大晦日しぼり、元旦しぼり、立春朝しぼり等。このしぼりが揃い踏みする頃、源泉徴収票が舞い込み始め、どれこれもたっぶり絞ってある。バイト先のものは乙表なので華々しくバイトしぼりというのか。税理士は確定申告で還付されますからと慰めてくれる。毎月のレセプトも時々納得のゆかない減点査定が届くがこれはレセプトしぼりか。昨年のものであるがレセプトの返戻がきた。病名もれ、適応とは認められない等、理由は夫々であるがそれに書いてあったコメントに驚いた。保険の審査委員になられている方はそれなりの経験と人間的に立派な方達と思っていたが其処に書かれてあった言葉は同業者の医師に対する気配りや、人を指導するという姿勢は全く見られずミミズが這った様な言葉が一行。字は人を表すというのが私はこれをファイルに残し他の人に感想を聞きたいと思っている。

全く医者の世界も弱肉強食の様だ。どっちを向いても明るい話題は何もないが、せめてオリンピックの入賞者に報奨金はもちろん所得税生涯免除とか、社会人ではないアスリートには幾らかの補助金を交付し親の負担を軽くしてやるとかして不況に左右されないスポーツ振興策を考えてみたらどうだろう。

最後に心に残った同世代の患者の言葉を紹介しよう「先生、まちゃまちゃてれば だみ出すじゃんこもねぐなるで」同感である。

(緑の狸)